

構造構成的質的心理学の理論的射程 —— やまだ (2002) と菅村 (2003) の提言を踏まえて

西條剛央
Takeo Saijo

要約

この論文の目的は、構造構成的質的心理学の観点から2つの論文(菅村, 2003; やまだ, 2002)を検討することにより、質的心理学の方法論的・理論的射程を明らかにすることであった。以下の点が議論された:(a) やまだ(2002)によって批判された内的視点に基づくナラティブアプローチは質的心理学として適切なものである、(b) 菅村(2003)とやまだ(2002)によってなされたいくつかの批判は、ナラティブアプローチと実験心理学の認識論の相違を考慮しないため不適切なものとなっている、(c) 他方、彼等の批判はナラティブアプローチの気をつけるべき点を明らかにするものであった、(d) 仮説継承と生成継承性との相違点が明らかにされた、(e) 構造構成的質的心理学は質的アプローチのグランドセオリーとなりうることが示唆された。最後に我々は重要な議論のために建設的な態度を持たねばならないことが強調された。

キーワード

構造構成主義, 構造構成的質的心理学, 仮説継承, ナラティブ, 内的視点

Title

Theoretical Suggestions for "Structure-Construction Qualitative Psychology": Comments on Yamada (2002) and Sugamura (2003)

Abstract

The purpose of this paper was to comment on Sugamura (2003) and Yamada (2002) and to consider the applicable scope of qualitative psychology in terms of the methodological and theoretical implications from the standpoint of "structure-construction qualitative psychology." The suggestions given were as follows: (a) the narrative approach based on an emic perspective critiqued by Yamada (2002) could be appropriate as qualitative psychology, (b) some critiques done by Sugamura (2003) and Yamada (2002) could be inappropriate in that they did not consider the epistemological differences between the narrative approach and experimental psychology, (c) on the other hand, their critiques revealed what one should be aware of regarding the narrative approach, (d) the differences between the concepts of "hypothesis-testing" and "generativity" were pointed out, and (e) it was suggested that "structure-construction qualitative psychology" could be a grand theory of qualitative approaches. Lastly, the importance of having a constructive attitude for further discussion was emphasized.

Key words

structural constructivism, structure-construction qualitative psychology, hypothesis-succeeding, narrative, emic perspective.

はじめに

やまだ(2002)と菅村(2003c)は、西條論文(2002a)に対して問題点を指摘した。これらの批判は質的研究全般に関わる問題と考えられるため、今後の質的心理学の発展のためにも、開かれた場で吟味していく必要がある。したがって、本稿ではそれらの指摘や批判を真摯に受け止め、検討していきたい。その上で構造構成的質的心理学の質的心理学に対する理論的射程を明確化する。

1 やまだ論文(2002)を中心とした回答

まず、やまだ論文(2002)の指摘や批判を中心に答えていくこととするが、菅村論文(2003c)との重複部もここで取り上げる。

1-1 事例選択の恣意性

やまだの「仮説に適合する都合のよい事例ばかりを恣意的に選択し、仮説に合致しない事例を無視しているのではないか」(p.72)との指摘は、事例選択の必然性(理由)が記述されていないことに起因する問題であり、妥当な批判だと思われる。

1-2 内的視点・トートロジー・再現困難性

次に、やまだ(2002)が西條論文に対して提起したモデル生成に関連する問題点を検討する。第一に、「研究者が単に外側からの分析に終わらず、語り手の心理の内側に入り込んで推測を含んだ心理状況を分析すること」(p.74)、第二に「語り手の内側に入り込んだ分析を、同じ記述言語で表現することによる、トートロジーや検証・再現困難性」(p.74)が指摘されている。

しかし、西條論文の事例 2-1 の分析過程(p.64)をみれば分かるように、そこでは、テキストの文脈や一

次資料等を踏まえつつ心理現象を読み取っており、「語り手の心理の内側に入り込む」といっても、根拠を示さずに解釈を行なっているわけではない。また、西條論文(2002a)では、テキストから解釈を導き出すそのプロセスを可視化していることから、反証可能性は保証されており、さらに心理現象を構造モデルとして提示したことから再現可能性も保証されることが論証されている(西條, 2002b)。

また、やまだは「研究者が語り手の心情に踏み込んで解釈することは、考察を深くするからおおいに奨励されてよい」としながらも、『感受性が高まった』言動から『感受性の高まり』を推測するのでは、同語反復のトートロジーになり、説明したことになる」と批判している。しかし、事例 2-1 では「ああ、…きれいな夜明けだったア」というセリフを指し、「そのセリフ(二重下線部)から、しみじみと夜明けのうつくしさを感じていたことがわかる。このことから周吉の感受性の高まりが推測される」と述べていることからわかるように、決して「感受性が高まった」言動から「感受性の高まり」を推測してはいない。したがって、この分析はトートロジーではない。

それどころか、質的研究の共通見解として「内的視点(emic perspective)」を持つことが挙げられる(西條, 2003a)。つまり「その環境の中で生きている内部者の視点をもつ」(Holloway & Wheeler, 1996/2000)ことであり、「研究される現象や出来事を内側から理解する」(Flick, 1995/2002)ことである。それを考慮すれば、西條論文(2002a)で導入された「内外の視点の二重性に身を置く」という新たな分析視点は、他の質的研究においても有効な視点となりえるだろう。

1-3 ナラティブアプローチの特徴：全体的構造化

次に「一つの仮説のなかに『事実』と『解釈』『考察』を混合して入れたり、複数の意味を含んだ長い仮説を提示する問題」(やまだ, 2002b ; p.75)を検討する。これらは西條論文(2002a)の修正仮説①に対する指摘と考えられるため、以下具体的に検討する。

指摘にあるように、修正仮説②の「…死とは対照的な…」との記述は、テキストから読み取られた解釈に基づくものではなく、単なる考察であることから、

仮説に含めるべきではなかったと思われる。さらに、その修正仮説提示までのプロセスに問題がある。ナラティブモードでは「個別の具体性」、「日常の細部の本質的顕在」自体を複雑なままモデルとして代表させる方向性を持つ（やまだ，2000a，2000b）。すなわち、これは物語論的研究の意義やそれを活かす方法論に関連する重要なポイントであるため、次にその修正プロセスを検討する。

…生死のぎりぎりの境界では、感受性が高まっている様子がほぼ全事例に見られた。// その高い感受性によって、周囲にある、~~死とは対照的な、~~再生を繰り返し継続し続ける美しい自然現象のうつくしさ…を感じ取り「天気…」に関連づけてそれらに言及されることがあるのだろう。

（西條，2002a，p.63-右側下から15行目；「//」と字消し線は新たに加筆した）

上述したように、字消し線部は、単なる推測に過ぎないことから削除すべきといえる。また、「//」にある断続と、終わりにある「のだろう」という推測的な表現にも問題がある。修正仮説②における構造の連続性は、事例1-1，1-3，1-4，1-5のテキスト解釈により確認されているにもかかわらず、ここではそれが記載されていない。さらに「//」のところでこの連続性が分断されており、さらに「のだろう」という推測的な表記によって、これらが単なる考察のように示されている。連続性（全体性）を失わずに構造化できるナラティブアプローチの利点を活かすならば、以下のよう

…事例1-1，1-3，1-4，1-5からその高い感受性によって、自然現象のうつくしさ…を感じ取り「天気…」に関連づけてそれらに言及されるプロセスが確認された。

（下線部が主な修正点）

1-4 仮説単純化の妥当性

次に、これに関連して「複数の仮定が一つの仮説の

中に含まれると、完全な合否が出しにくいので、仮説はできる限り単純明晰にするべき」（やまだ，2002b）を検討する。これは菅村（2003c）の「仮説は、本来は，“If, then…”ロジックで示される必要がある」（p.155）という指摘にも重なるといえよう。

しかしこれらの批判は、論理実証モードに基づく主張であり、物語モードに基づく研究として妥当な見解とはいえない（やまだ，2000b；p.21参照）。批判を行う際には、自他の背景にある認識論（モード）を十分に考慮する必要がある。西條論文（2002a）にみられるような、複数の仮定を全体として提示する仮説提示法は、物語モードの特徴を活かし、心理現象を全体としてモデル化したという意味で、むしろ奨励されるべきだろう。

2 菅村論文（2003）を中心とした回答

菅村論文は、実験心理学の立場から書かれているが、特にその背景に論理実証モード（客観主義）を前提としていることを押さえておく必要があろう。上記したようにおおむね論理実証モードから物語モードへの批判になっているため、結果的に的外れな批判となっている部分もある。しかしそれでもなお、意義ある提言がみられるため以下検討を進める。

2-1 実験 or 質的研究？

菅村は「実験できないものを質的心理学が対象にするというサトウ（2002）の見解には賛成である」「本当に実験できないかどうかということを確認するという作業を怠っているのは、学問の進展は期待できない」（p.154）と主張している。しかし、これは研究対象や目的を考慮にいれず、質的研究法よりも実験的方法の方が優れているという前提に暗黙裡に依拠しているといえよう。確かに再現性の高い現象を追求したいという「関心」や、要素を特定していきたいといった「関心」のもとでは、実験的方法が優れているといえるが、そういった自らの「関心」を括弧にいれ、対象化したならば、このような提言は成立しないことがわ

かるだろう。

そもそもそれらは「問いの立て方」が違うのであり、実験ができなければ質的研究法、質的研究法ができないから実験、といった話ではないのだ。

2-2 記述と機序の解明

「生死の境界で天気などが語られるのはなぜかという問い」に対し、西條は『感受性の高まり』を仮定しているが、「これは因果関係を明らかにする媒介変数というよりも、解釈に近いものである」と述べている。そして、「事象 A (生死の境界) と事象 B (天気の語り) のあいだに因果関係を見い出そうとするならば、A と B のあいだにあるブラックボックス、つまり、そもそも、どのようにして感受性が高まるのか、何が済 [澄] みきった緊張感にさせるのが問題にされなければならない」(菅村, 2003c; p.156 [] 内は筆者による修正) と主張する。

1-2 で述べたように、西條論文においては、事象 A (生死の境界) と事象 B (天気の語り) のあいだに構造化された「感受性の高まり」は、勝手に想定したのではなく、テキストの分析結果に基づいている。また、後半の「どのようにして感受性が高まるのか」という問いは、菅村自身が「もし仮説の妥当性が認められたならば、研究は因果関係へと進み、メカニズムを解明しようとする」と述べているように、西條の仮説(2002) が成立した後に初めて議論可能となる問題であろう。

また現象の解明と機序の解明に関しては、「現象の解明を疎かにして、機序を『語る』べきではないだろう」(p.156) と述べているが、構造構成的質的心理学が認識論的基盤とする「構造構成主義」(西條, 2002ab, 2003abc, 2004 予定) においては、「現象の解明」と「機序を明らかにすること」は同義になりうる。なぜなら、そこでは「科学とは我々に立ち現れる現象を構造化すること」という構造主義科学論(池田, 1990) の科学哲学を援用しているためだ。

2-3 継承と生成継承性

菅村論文では、「継承」についてのコメントが散見

される。まず、「西條は、従来の方法を『検証的方向性』をもつものとし、彼の考案した方法を『発展的方向性』のあるものとしている」(p.152) と述べている。しかし継承とは「関心相関性」を基軸とし、精緻化・発展性方向性やその比率は、研究対象や目的と相関的に決定される枠組みである(西條, 2003a)。また、それはやまだ(2001) — 西條(2002a) — やまだ(2002) といった一連の仮説継承研究¹⁾ によって、実行可能性と有効性が確認されている(西條, 2002b; 2003a)。以上のことから、「多様性を是とし」「混沌を意味あるカオスに変え」(菅村, 2003c; p.152) 新たな方法の提示に成功しているといえるのではないだろうか。

なお、「継承」と「生成継承性」は成立背景の相違に伴い機能するレベルは異なると思われるが、その類似性の高さゆえに、誤解も生じているようである。例えば、矢守(2003) は「本研究は、やまだ(2002) が論理実証主義に依拠する心理学研究をこれまで方向づけてきた仮説検証プロセスに変えて、質的な心理学研究を先導し、かつその成果を蓄積するための基本原理として提起している仮説の『生成的継承』プロセスの一端を担おうとする」ものと誤解しており、この内容は「継承」(西條, 2002a; p.56) を指しているのは明らかである。継承といえどもその継承対象を正確に把握する必要がある。

一方、やまだ(2002) の提唱した「生成継承性」とは、エリクソンの *generativity* という概念を拡張し、「日本では特に先行研究からの継承性が弱く散発的であり、先行研究が 10 年もたつと忘れられ、用語を少し変え意匠を少し変えたものが新しいものであるかのように出てくる」現状を憂いて提唱されたものである。「学問の発展にとって本当に必要なのは、先行世代の研究をしっかり引き継ぎながら新たな生成をしていく生成継承性をもつ研究をしていくことであろう」とあることからわかるように、これは具体的方法論というよりも研究者としての「態度」を概念化したものと考えられる。

また、やまだ(2002) は、生成継承性とは「個人を超え、より長い時間軸のうえでの世代間のダイナミックな関係構築にかかわる概念」であり「一方では生産性や創造性と、もう一方で社会や文化のなかで次世代

や将来世代を育てていくケアや教育とむすびつので、単に成人期の発達課題という個人心理の領域だけでなく、より一般的な社会的概念として発展させるべきである」と主張する。このことから分かるように生成継承性は、研究者としての態度や、世代間のコラボレーションといった、よりマクロなレベルで機能する概念であるといえる。

以上の相違点は、「継承」と「生成継承性」のどちらが優れているかといった問題ではない。少なくとも構造構成主義の観点からは、それらは関心や目的と相関的に選択されるべきものであり、両立可能なものである。したがって、個々の研究、方法論レベルで先行研究を引き継ぐ場合は、「継承」が相応しい²⁾であろうし、より長い時間軸における、社会や文化、世代間といったマクロレベルで先行知見を引き継ぐ場合は、「生成継承性」を用いることが妥当といえよう。

2-4 改善点

次に、菅村論文でなされた妥当な批判を取り上げて、西條論文(2002a)の改善点を挙げていく。菅村は、やまだ(2002)と西條(2002a)の仮説を指し「両者の仮説において認めがたいのは、『…ことがある』という表現法である」とする。「この表現は、当初、やまだ(2001)が用いていた『…のは偶然ではない』を西條が変更したものであるが、『…ことがある』では仮説にならない…西條は、『ことがある』という表現で、おそらく頻度の増加を表そうと意図したと推測されるが、『偶然ではない』を『ことがある』に変更しても頻度に関する情報は付加されない」(菅村, 2003c ; p.155)。

筆者は、菅村が鋭く指摘したように、やまだの仮説①が支持されたことを踏まえ、それを強化するべくこの表現を使ったのだが、頻度の増加によって仮説を強化する方法は不適切であったといわねばならない。なぜなら、生死の境界において天気等に言及する類のテキスト選択をした結果、この仮説を確認できるのは当然であり、これではトートロジーに陥ってしまうからである。ここでは新たな分析視点が導入されたからこそ得られた、生死の境界において天気への言及が現れる構造に焦点化したモデル(西條, 2002a)の仮説

②)を示すことによって、そこに必然性を見いだせるようにし、「やまだの仮説①『…は、偶然ではなさそうである』は確認された」とすべきだったといえよう。

2-5 批判を引き出した構造の解明

以上検討してきたように、菅村の批判の妥当性は様々であったが、「なぜこのような批判がなされたのか」といったメタレベルの問いを立てることは意味のあることだろう。結論をいえば、菅村論文でなされた一連の批判は、従来の質的心理学に、認識論的基盤から方法論的概念、評価基準に至るまで、高い整合性・一貫性のある理論的枠組みが不在であったことに起因していたといえよう。従来の質的心理学は、個々人が直観的・断片的に行っていたため、独自の科学性を担保できずに中途半端に論理実証主義の枠組みに足を踏み入れ、場当たりの折衷論になることが多かったといわざるを得ない。したがって、「質的心理学ならではの認識論や方法論の模索が当面の課題になるであろう」との菅村(2003)の指摘はきわめて妥当なものといえよう。

3 質的心理学の理論的最前線

それでは構造構成的質的心理学(西條, 2003a)は、菅村の指摘した問題を打開できているのであろうか。そこでは構造構成主義という認識論的基盤に依拠した上で、「構造」を基軸として「継承」や「アナロジーによる一般化」といった方法論的枠組みが整備され、広義の科学性を担保可能であることが論証されている。それは「質的アプローチを中心に心理的現象を構造化し、信憑性のある構造モデルを追求するという要請(公理)に基づく理論」と定義されるメタ理論的枠組みでもある。

ここでいう『公理』とは、簡潔に言えば、「その領域においてより妥当で優れているものとは何かを判断するための前提(方向性)」といえるものである³⁾。橋爪(1988)が指摘するように、「なにが『正しい』

かは、公理（前提）をどう置くかによって決まる」といえよう。したがって、この公理を共有できなければ、突き詰めれば何でもアリの価値相対論に行き着いてしまう。

構造構成的質的心理学というメタ理論においては、それぞれのアプローチは先に挙げた『公理』に照らし合わせて、関心相関的に選択されるため、相対主義は回避可能となるのである。これにより「場当たりの折衷主義」は、認識論的にも整合性のある「方法的多元主義」へ深化したといえる。以上の理論的構造によって、構造構成的質的心理学が多種多様な質的アプローチ（ソフト⁴⁾）を十全に機能させるグランドセオリー（ハード）ということができるのである。

4 建設的議論に向けて

最後に、本稿より先に菅村論文（2003c）への反論を試みたやまだ（2003）の論考を踏まえつつ、質的心理学の発展という大局的な観点から議論の仕方について検討してみたい。なぜなら、いくら本誌が議論のための開かれた場を提供しようとも、学知を発展させるためには議論の仕方そのものを鍛えなければ建設的議論は起こりにくいからだ。実際に、やまだの回答のほとんどは菅村の実験心理学の理解に対する批判に留まり、質的心理学の発展に寄与するコメントは引き出せておらず、菅村—やまだの誌上討論はそれのみでいえば失敗に終わっているといえよう。

菅村論文では、一見するとかなり批判的に議論を展開しているように見えるが、注意深くその論理構造を掘めば、各セクションの終わりに、質的心理学が今後乗り越えるべき課題を明確化するというかたちでその発展に貢献していることがわかる⁵⁾。しかし、長年にわたり質的研究を広めるべく地道に活動してきた研究者が、類似した批判を繰り返して受けてきたことは容易に想像できる。ともすれば、菅村の批判は従来型の無自覚客観主義者が侵略してきたとしか映らない可能性もあり、それを冷静に受け止めることは容易ではないだろう。したがって、菅村論文に、質的心理学の発展に向けた1ステップとして、「今後の課題を明確化す

るために敢えて厳しい視点から検討する」という断りが付されたならば、より建設的なやり取りに発展した可能性があるだろう。今後有意義な議論を重ねるためには、相互の認識論を十分に考慮し、相手の枠組みに立った上で、「よりよくするためにはどうしたらよいか？」という建設的問いに基づく検討が不可欠となるだろう。

『質的心理学研究』が求められているのは、観客席からの評論ではなく、第一線で自ら汗を流して限界に挑みながら一步一步研究を実践していく地道な研究活動である」というやまだ（2003）の主張には迫力がある。批判は学問の目的とするところではないし、100の批判よりも、1の創造の方が困難かつ価値がある行為であると考えられる。しかし、批判を真摯に受け止め、自らの、そして質的心理学の発達力へ変えていくことも重要だと思われる。

本稿で為された提言も今後継承され、開かれた議論を通して質的心理学における学知の建設的構築につながれば幸いである。

注

- 1) 西條（2002a）の提起した「仮説継承型ライフストーリー研究」は、医学領域では『ナラティブ・ベイスド・メディスンの実践』の著者、斎藤清二により、その著書の中で「構造仮説継承型事例研究」として提唱されている。
- 2) また英語教育研究領域においては、山西・田中（2003）によって、発展的に継承され、質的研究（検証）と量的研究（継承）の組み合わせによるモデルが提示されている。また西條（2003c）は仮説に加え、「対象・テーマ・認識論・方法論・理論・概念」等の研究を構成する様々な要素を継承対象として捉えることを提案しており、それによって、様々な領域・立場における各研究（論文）が、ネットワーク状に連結していくものとして捉えられることを可能とした。それによって、人間科学知の体系化が可能となるように、各研究者の人間科学知の捉え方・体験の仕方を変更したのである。
- 3) 本稿で用いられている『公理』とはユークリッド幾何学における「公理」とは別のものである。吉永（1992）によれば、ユークリッド幾何学の「公理」とは、「共通概念」の意味であり、たとえば「同じものに等しいものは互いに相等しい」とか、「全体は部分より大きい」など、一般的な量関係についての「自明な命

題」を表している。例えば、物理学、化学といったいわゆる自然科学の公理は、「いつでも誰でもが自然を人間のために最も効率的に利用できるように秩序としてそれを体系化する、という要請である」（竹田、1987）。（質的）心理学は、自然科学とは異なる現象を扱っているから、それに応じた『公理』を確立すべきなのである。さもなければ、中途半端な自然科学の地位に甘んじるしかないだろう。

4) ソフト集としては、Flick (1995/2002) の『質的研究入門：〈人間の科学〉のための方法論』が現在最も優れたものの1つといえよう。

5) 菅村は、質的研究普及の思想的バックグラウンドとして機能している構成主義 (constructivism) を理論的に展開して多くの論文 (菅村, 2000, 2002, 2003a, 2003b) を産出しており、その意味では国内の構成主義の第一人者の一人といえることも考慮する必要がある。

引用文献

- Flick, U. (2002). 質的研究入門：〈人間科学〉のための方法論。(小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子, 訳). 東京：春秋社。(Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- 橋爪大三郎. (1988). はじめての構造主義. 東京：講談社.
- Holloway, I., & Wheeler, S. (2000). ナースのための質的研究入門：研究方法から論文作成まで。(野口美和子, 監訳). 東京：医学書院。(Holloway, I & Wheeler, S. (1996). *Qualitative research for nurses*. Malden: Blackwell Science Ltd.)
- 池田清彦. (1990). 構造主義科学論の冒険. 東京：毎日新聞社.
- 西條剛央. (2002a). 生死の境界と「自然・天気・季節」の語り：「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示. 質的心理学研究, **1**, 55-69.
- 西條剛央. (2002b). 人間科学の再構築Ⅰ：人間科学の危機. ヒューマンサイエンスリサーチ, **11**, 175-194.
- 西條剛央. (2003a). 「構造構成的質的心理学」の構築：モデル構成的現場心理学の発展的継承. 質的心理学研究, **2**, 164-186.
- 西條剛央. (2003b). 人間科学の再構築Ⅱ：「人間科学の考え方」再考. 人間科学研究, **16**, 129-146.
- 西條剛央. (2003c). 人間科学の再構築Ⅲ：人間科学的コラボレーションの方法と人間科学の哲学. ヒューマンサイエンスリサーチ, **12**, 133-145.
- 西條剛央. (2004 予定). 構造構成的主義とは何か. 京都：

北大路書房.

- 斎藤清二. (2003). いわゆる「慢性膝炎疑診例」における構造仮説継承型事例研究. 斎藤清二・岸本寛史 (編著), ナラティブ・ベイスド・メディシンの実践 (pp.230-246). 東京：金剛出版.
- サトウタツヤ. (2002). 「ふいーるど」としての雑誌. 質的心理学研究, **1**, 167-168.
- 菅村玄二. (2000). クライアント中心療法についての構成主義的見解：現象学的アプローチと自己実現傾向の再考. 人間性心理学研究, **18**, 95-104.
- 菅村玄二. (2002). クライアント中心療法における変化のプロセスの再考：構成主義の立場から. 理論心理学研究, **4**, 1-12.
- 菅村玄二. (2003a). カウンセリングの条件の再考：構成主義によるクライアント中心療法の再解釈を通して. 心理学評論, **46**, 233-248.
- 菅村玄二. (2003b). 構成主義, 東洋思想, そして人間科学：知の縦列性から知の並列性へ. ヒューマンサイエンスリサーチ, **12**, 29-48.
- 菅村玄二. (2003c). 生死の境界での語り：実験心理学から見た質的心理学. 質的心理学研究, **2**, 150-158.
- 竹田青嗣. (1987). 現代思想の冒険. 東京：毎日新聞社.
- 竹田青嗣. (1989). 現象学入門. 東京：NHK ブックス.
- やまだようこ. (2000a). 人生を物語ることの意味：なぜライフストーリー研究か？. 教育心理学年報, **39**, 146-161.
- やまだようこ (編). (2000b). 人生を物語る：生成のライフストーリー. 京都：ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2001). いのちと人生の物語：生死の境界と天気の語り.
- やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編). (2001). カタログ現場心理学 (pp.4-11). 東京：金子書房.
- やまだようこ. (2002). なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか？：質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承的サイクル. 質的心理学研究, **1**, 70-87.
- やまだようこ. (2003). 「実験心理学」と「質的心理学」の相互理解のために：菅村論文へのコメント. 質的心理学研究, **2**, 159-163.
- 山西博之・田中博晃. (2003). 英語教育研究学における質的研究と量的研究の融合. 仮説検証から仮説継承へ. *Language Education and Technology*, **40**, 161-173.
- 矢守克也. (2003). 4人の震災被災者が語る現在：語り部活動の現場から. 質的心理学研究, **2**, 29-55.
- 吉永良正. (1992). ゲーデル・不完全性定理：“理性の限界”の発見. 東京：講談社.
- (2003.6.30 受稿, 2003.10.31 受理)